

No3 文字を書くことが苦手な子への支援をどうするか

全般的な知的発達の遅れはないけれども、聞く、話す、読む、書く、計算するなど特定のものの習得と使用に著しい困難を示す状態は、学習障害（LD）と定義（1999 文部省）されており、その中でも、特に「見ること」につまずきがある場合、「書字障害」として下記のような学習困難が予想されます。

（1）一生懸命書いても、文字の形がとれず書き間違ってしまう

鏡文字になったり、「く」「へ」など似ている文字を書き間違ったりする場合

- ・形の違いを区別することが苦手
- ・文字の形を記憶しておくことができない。
- ・目と手の協応がうまくできず、細かいところに注視して書けない。等

- ・線や形のなぞりがきや、塗り絵などを通して、形を意識させる。
- ・なぞりがきをした後、すぐ横に文字の見本を置いてそれをゆっくり視写する練習をする。（大きめの文字の手本で練習）
- ・書く分量を少なくし、抵抗感を軽減する。
- ・書く部分を色づけし、注視しやすくする。
- ・手を添えて一緒に書く。

（2）細かいところに注意して書けない

ノートの文字がマス目からはみだしたり、漢字の細かいところに注意して書けない

- ・マス目のどこに書いたらよいか分からない。
- ・自分ではきちんと書きたいのに、目と手の協応がうまくできずはみ出してしまふ。等

- ・ノートのマス目を大きくする
- ・マス目の中心に線を引き、書く位置を意識しやすいようにする。
- ・「ぎゅっと止める」「すうっと伸ばす」など言葉で言いながら書く。
- ・へんやつくりなどに分けて覚える。例えば、「公はハムと書くよ」「板は、木に関するから木へんだね」

（3）黒板の文字を書き写すことが苦手

板書を写すことを、いやがり書かない。書き始めても途中でなかなか進まない

- ・板書のどこを見て書いたらよいか分からない。
- ・黒板の文字を見てノートに目を移すまでの間、記憶していることが難しい。等

- ・書くべき箇所に線を引く、線で囲む、上に印をつけるなどして、注目するところを明確に分かるようにする。
- ・書く量を減らし、負担感を軽減する。
- ・前もって、板書と同じものを用意しておき、ノートの横に置いてあげる。それを見て書けるようにする。

（4）作文が書けない

話はできるのに、作文を書くことが、とっても苦手

- ・出来事を想起できない。（いろいろな出来事が混ざり、思い出の焦点が絞れない）
- ・文字を書くこと自体が苦手。
- ・文章の構成が出来ない。等

- ・質問に答えることで出来事を思い起こしやすくする。
- ・（ ）に穴埋め式に書くことで、作文に慣れる。
- ・経験を時間の経過にそってメモし、それを手がかりにして書く。
- ・作文メモの例 キーワードを提示する。
時系列に思い出の写真・具体物を貼っておく。等

<指導のポイント>

- ・このようなお子さんは、「20回書けば覚えられる!」「ここは、はねていない!」など、熱心に教え込もうとすると、ますます書くことが嫌になることがあります。筆順とかはねなど細かいことよりも、書こうとする意欲を育てることが大切です。

そのためには、比較的好く書けた字に注目させ、「こんなに上手に書けるんだね!」と、達成感をもたせてあげてください。

